



Title	阪大生が創る、阪大生のためのリーダーシップ養成支援プログラムの開発とその効果検証
Author(s)	板谷, 祥奈
Citation	平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2016
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/54662">https://hdl.handle.net/11094/54662</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 平成 27 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏名	いたや さちな 板谷 祥奈	学部 学科	経済学部 経済経営学科	学年	3年
ふりがな 共 同 研究者名	とみさと ゆうた 富里 雄太	学部 学科	法学部国際 公共政策学科	学年	3年
アドバイザー教員 氏名	家島 明彦	所属	教育学習支援センター		
研究課題名	阪大生が創る、阪大生のためのリーダーシップ養成支援プログラムの開発とその効果検証				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。				

### 研究目的

本研究の目的は、3泊4日の合宿型研修の実施を通じて、(1)阪大生のリーダーシップ養成を支援すること、(2)阪大型リーダーシップ養成支援プログラムを開発・効果検証することの2つである。

大阪大学では、平成19年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」(学生支援GP)に「市民社会におけるリーダーシップ養成支援-「阪大スタイル」育成プログラムの開発-」が採択されて以来、学生のリーダーシップを開発するための合宿型研修を、学生が主体となって運営してきた。補助金事業期間が終了後もリーダーシップ養成支援合宿は発展的に継承・継続されており、平成26年度は、約40名の学生が3泊4日の合宿に参加した。昨年度の参加者に対するアンケート調査の結果を踏まえて、今年度は「リーダーシップの土台となる自己認識と社会認識を再構築し、組織の中で自分に適したリーダーシップを実際に発揮できる能力」を育成するプログラムの開発・実施を企画するに至った。

### 研究計画・方法

#### (1) リーダーシップ養成支援プログラムの実施

リーダーシップ養成支援プログラムとして「大阪大学リーダーシップ養成支援合宿」を実施した。具体的には、2015年8月9日(日)～12日(水)に、大阪府の研修施設(豊中市立青少年自然の家わっぱる)で、3泊4日の合宿型研修をリーダーシップ養成支援プログラムとして実施した。参加者は21名(他大学の学生2名を含む)であった。さらに学生スタッフとして阪大生16名が参加した。

今年度は、昨年度の反省を踏まえ、合宿期間中だけではなく、合宿の前後にわたって参加者をサポートする「手厚い」リーダーシップ養成支援プログラムを企画した。

【プログラム内容】（詳細プログラムについて別冊の報告書を参照）

- ① 合宿の前：事前ワークショップ ・・・各自の自己認識の程度を自覚してもらう
- ② 合宿当日：講師ワークショップ ・・・講師の方のご講演により社会認識を深めてもらう
- ③ 合宿当日：語りワークショップ ・・・対話の場を通して自分の価値基準を認識し、自分のやりたいことを見つけ、行動を宣言してもらう

合宿最終日に昨年度と同一形式のアンケート調査を行い、昨年度との比較検討を実施した。プログラム受講後から3ヶ月の時点で、参加者を対象に事後アンケート調査を行い、モチベーションの継続も検討した。また、合宿研修全体の報告書（別添）を発行した。

（2）プログラムの効果検証

プログラムの効果検証のためにアンケート調査を実施した。満足度について、平成26年度に実施した事後アンケート調査をベースに平成27年度も事後アンケート調査を実施した。合宿最終日に参加者20人を対象に、5件法で合宿に対する満足度を調査した。また今回新たに自己認識に関する質問項目も追加した。具体的には、「自分にとっての重要な判断基準」、「自分の理想的なあり方」、「取り組みたい事柄」がそれぞれ①認識できているか、②それがどういった経験に基づいたものなのかを認識できているか、③認識する必要性を感じるか、④認識するに至るプロセスに本合宿が貢献したと思うか、の4通りの設問を追加した。①、②については「認識できている」から「認識できていない」まで、③については「感じる」から「感じない」まで、④については「そう思う」から「そう思わない」まで、それぞれ5件法を用いた。また④については特に貢献したと思うプログラムを選択する設問も追加した。満足度以外の項目については3ヶ月後にも調査を実施し、認識度の継続を測定した。

**研究成果**

①合宿直後の満足度について

「満足」の割合は65%であり、昨年度（53.8%）に比べて向上した。合宿全体の満足度はおおむね高く、自由記述から自分と向き合うことができたという実感が満足度に結びついたと考えられる。自分についてより深く考える機会が合宿に対する満足度に影響を及ぼしている可能性がある。その点、本合宿で1対1での対話など自己認識に関するワークの時間を前年度に比べ多く配置していたことが、今回の結果に影響したと推察される。（詳細は別添の報告書参照）

②3ヶ月後の認識度の継続について

「自分にとっての重要な判断基準」に対する認識度については、変わらなかつた人が最も多かった。「自分の理想的なあり方」に対する認識度についても、認識度が変わらなかつた人が最も多かった。合宿での効果が持続されていると考えられる。「取り組みたい事柄」に対する認識度については、下がった人と上がった人が混在する形となり、合宿の効果が継続しているとは言えない結果となった。これは、2学期が始まり参加者が学生としての日常生活に追われる中で取り組みたい事柄が拡散したり、見えなくなったりしたのではないかと思われる。